



ジェリー号



第194号

発行日：令和二年3月1日

発行者：医療法人 博愛会

福田脳神経外科病院

院内情報委員会

診察室から

～ 一過性脳虚血発作 脳梗塞の前触れ ～ 院長 福田 雄高

脳の血管の病気を総称して脳血管障害といますが、そのなかでも脳に届く血流が途絶えて、脳の一部が壊死してしまう病気を脳梗塞とといいます。

脳梗塞には主に、高血圧や糖尿病、高脂血症、加齢、喫煙、肥満などの影響で、動脈硬化が進行して血管が細くなって詰まるタイプ（血栓性梗塞）と、心房細動という不整脈が原因で、心臓にできた血栓が脳に流れて詰まるタイプ（塞栓性梗塞）があります。

詰まってしまい脳に不可逆的な変化が起きると脳梗塞と診断できます。しかし、脳梗塞になりかけたという状態があり、病名としては一過性脳虚血発作とといいます。詰まりかけたけど、なんとか途絶えそうな血流が回復した、あるいは脳に流れた血栓（血のかたまり）が溶けた、などの理由で脳梗塞にまでは至らなかった状態です。心臓の病気という狭心症に似ています。

典型的な症状として、一時的に言葉がでなくなった、もつれた、片方の手足に力が入らなくなった、痺れがでた、片眼が見えにくくなった（多くは数分～数十分）などは一過性脳虚血発作を疑います。

この病気の心配なところ、重要なところは、症状は一時的なものでも、脳梗塞になりかけている状態であり、いずれ近いうちに脳梗塞に至る危険性が高いということです。特に症状を起こしてから数日は、発症し後遺症を残す可能性が高く、原因を調べることで、脳梗塞に至らない様に直ちに治療を始めることが重要です。最近の研究により、従来考えた以上に短期間に脳梗塞を発症するリスクが高いことが明らかになってきました。

治療は、脳梗塞になりかけた原因によって異なります。早期に診断・治療を行えば、脳梗塞発症リスクが劇的に改善することがわかってきています。

急に言葉がもつれた、手足に力が入らなくなった、痺れたけども、少し様子みてよくなったから大丈夫だろうは実は危険な前触れの可能性が大いにあります。おかしいと思ったら、ためらわずに早めに連絡頂ければと考えます。

できるだけフレッシュで綺麗な空気を吸っていたいものです。
(ロンドンハイドパーク)

